

## スタッフルーム

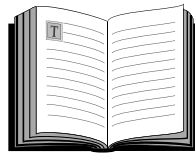
## 結婚式と「かちゃあしい」と私

すぎ まりこ  
杉 真梨子

(日吉メディアセンター)

「かちゃあしい」という言葉を私が初めて聞いたのは今年の6月半ば、つい最近のことだ。映画やドラマでも使われたことがあるためご存知の方も多いただろう。しかし私にとって全く馴染みのないその言葉は、中々覚えられない上に耳で聞いただけでは発音もままならず（一度文字で見れば全く難しいことはないのだが意外と覚えられない）、祖母が「ディズニールランド」を何度きいても言えなかった気持ちがよくわかった。そんな言葉を私が覚えることになった理由、それは6月末に行われた従姉の結婚式にある。

「カチャーシー」とは、沖縄で祝い事の際に喜びを表現するために舞う踊りのことを指すらしい。奄美地方のとある島出身の私の両親は特に母方に兄弟が多く、先日結婚した従姉も母方の親族にあたり、彼女の両親もまた奄美の出身である。今回の結婚式は親族だけで行われたため、従姉側、つまり新婦側の参列者は皆奄美にルーツのある人々となった。



従姉自身は奄美で生まれ育ったわけではないが、せっくなので何か南国らしいことをと、祖母に民謡をうたうことを頼んだ。祖母はそのついでにと親戚一同でカチャーシーを踊り、喜びを参列者一同で分かち合おうと思立ったらしい。(なぜ沖縄の踊りを選んだのかは地図を見れば一目瞭然、奄美の文化は完全に琉球寄りである。)しかしいきなり音楽が鳴っただけでは新郎側の親族は何が何だかわからないであろう。

そこで冒頭に戻る。

「カチャーシーの解説をしてよ。」

久しぶりに実家に帰った私を待っていたのは、母親のこの一言だった。

解説自体は、正直なんのことはない。一言言うだけで後はなるようになる。問題はその後だった。マイクの前に立つ以上、私も一緒に踊らなければならなくなった。結婚式の一週間前、私は急遽祖母と両親にカチャーシーのレクチャーを受けることとなったのだった。

レクチャーといっても言われたことは二つ。「手を上にあげる」と「足を外に向けろ」。あとは音楽に合わせて適当に。(祖母は腰の振り方も教えてくれたが、残念なことに私にはセンスが

なかった。)親戚の結婚式だというのにこれでいいのかと一抹の不安がよぎる。

少し脱線するが、従姉同様、私自身も奄美で生まれ育ったわけではない。更に言うと、母の兄弟は一家族を除き皆若いころに島の外に出ており、その娘息子、つまり私の従兄弟たちも、ほとんどが島での生活を話には聞いても実際に経験することなく過ごしている。そんなわけで今回式に集まった従兄弟たちは、カチャーシーを踊れない。しかしその醍醐味は皆で喜びを分かちあうこと。はじめに踊る人たちが場にいる人々を次から次へ引っ張り出し、大人数で踊るのだ。

カチャーシーは披露宴も終わりに近い頃に踊ることとなっていた。音楽が鳴り始めると、かけ声や指笛の音とともにおもむろに叔父や叔母が立ち上がり踊り出す。まずその子どもたちが強制的に引っ張り出され、見よう見まねで手をふり足を動かす。そして新郎側

の親族の許へ行き手を引き、最終的には新郎新婦も交え、会場にいる全員が踊ることとなった。留袖、スーツ、パーティードレスにウエディングドレス…どんな格好でも踊る踊りは皆一緒。正装した大人たち(参列者はほとんどが大学生以上…)が三線のリズムに合わせてひたすら手をふる様子はさぞ異様な光景だったことだろう。洋風の披露宴会場が、幼いころに見た祖父母の家の座敷に見えた。新郎側はほとんどが訳もわからないはずであったが、それでも最後は皆笑顔、南国流の祝い方を喜んでくれたようだった。

そういう私自身もすっかり南国気分になった帰り際、ホテルマンの方に問いかけられた言葉で今いる場所を思い出した。

「今日は皆さん、奄美に帰られるんですか？」  
すみません、神奈川に帰ります…。